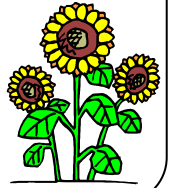


学級の生徒指導において、マイナス面にのみ目が向き、子どもたちを叱ってばかりの毎日になるケースがあります。逆に、叱りどころがつかめずに叱ることに躊躇し、子どもを叱らない（叱れない）といったケースもあります。そんなとき、学級の子どもたちは、学校を面白くないと感じたり、辛く切ない思いを抱いたりしているのでは…。教員も、叱ってばかりいる自分が嫌になったり、無力感に悩んだりします。

叱ることは難しいものです。2学期のスタートに当たり、叱ることの意義や適切な叱り方について考え合ってみませんか。



### <小・中共通>

#### 「寛大さ」と「厳しさ」のバランスがとれた指導

教員は、子どもに思いを寄せているからこそ、叱るべきときには叱るのです。成長の途上にある子どもを正しい方向に導くために、叱るべきときにはきちんと叱る必要があります。子どもには、叱られることにより、罪悪感や良心に気づき、規律を守る心などを育てていく面があります。

褒めることを基本に、叱るべきときには、きちんと叱る、「寛大さ」と「厳しさ」のバランスがとれた指導ができるようにしたいものです。以下に、ある先生が心がけている叱り方を紹介します。

#### 子どもの心に響く「叱り方7箇条」

##### ① 叱られる根拠を明確にしておく。

自分の何が問題で叱られたのかを子どもが分かるようにする。そのために、前もって、どんなときに叱られるか（例えば、暴言や暴力、いじめ等）を子どもと明確にしておく。

##### ② 確かな教育理念に基づいて叱る。（感情的に叱らない。）

その場の感情に任せた叱り方や、不公平な叱り方にならないように注意する。理念に基づき、悪いことは許さない、安易な妥協をしないといった指導は、子どもや保護者の信頼を得る。

##### ③ カウンセリング・マインドをもって叱る。

共感的な態度で、子どもの話（言い分）を最後までよく聞く。  
叱られて気落ちした子どもの気持ちに共感し、心を通じ合わせながら叱る。

##### ④ 子どものよい点を褒めてから叱る。

その子を愛するがゆえに不正は見逃せない。その子の成長を願うからこそ叱る。  
まず、よい点を心から褒める。その次に、叱るべきことをきちんと叱る。

##### ⑤ 悪い行為を叱る。（人格を否定しない。）

その子の取った言動は悪いが、その子自身は悪人でない。  
「人の悪口を言う、あなたは悪い子だ」という叱り方は、その子の人格を否定してしまう。  
禁句：「おまえの顔など見たくない」「教室から出て行け」「親の顔が見たいものだ」など

##### ⑥ 子どもの逃げ場を認めながら叱る。

子どもは失敗しながら成長する。四方を塞いでしまわないように配慮する。  
一度叱った後は、同じことでいつまでもねちねちと言わない。

##### ⑦ 叱る以上に褒める。（三つ褒めて、一つ叱る。）

褒めることが教育の基本。日頃から、よさをとらえて褒める。  
褒められて得た信頼感が基盤にあってこそ、ここぞの「叱り」が心に響く。

《 教育は、教員と子どもの人格のふれ合いの中でなされます。教員の言葉が、子どもの心を元気づけ、教員の笑顔が、子どもの心に安心感を与えます。子どもを思う教員の心が、子どもの心をとらえます。 》